

英日翻訳者が直面する問題点 翻訳学習者とプロ翻訳者にみる差異を中心に

井上 泉

Macquarie University

Abstract

It has been pointed out that current professional education in various domains at the tertiary level tends to be incapable of providing professional trainings in which their teaching/ learning contents do not meet requirements set by professional communities. This concern appears to be consistent with translator education due to its ongoing dominant use of ‘transmissionist’ approach (Kiraly, 2000). Discussion presented in this paper is based on the partial findings of the ongoing PhD research project. The research project as a whole makes an attempt to introduce a new pedagogical approach based on the concepts of expertise and problem-solving, and their application to translator education. To enable this approach to be realised in translator education, identifying translation challenges with which a translator is likely to face and discrepancies of such challenges between novice and expert translators are very necessary. In this paper, the focus of discussion is placed primarily on the exploration of ‘authentic’ translator challenges and the investigation of discrepancies in terms of the challenges between novice and expert translators.

1. はじめに

本稿の目的は、現在進捗中の博士課程における研究の一部を報告し、今後の翻訳研究（特に翻訳教育分野における研究）への一助とすることである。

医学、法律など「プロフェッショナル」と呼ばれる諸分野において、プロの養成を行う大学または大学院の教育内容が現場実務の実態と乖離していることが、指摘されている (Ericsson, 2004; Arts, et al., 2006)。大学における翻訳者養成課程においてもこの問題が存在しているものと考ええる。現在幅広く採用されている教授法は、SLT(Source Language Text) 自体の分析、テキストにおける翻訳のプロセスおよび原文に忠実かつ日本語として自然な TLT(Target Language Text)の創出を主眼とする傾向にある。さらに、教師が「ファシリテーター」(学習の促進者)ではなく「インストラクター」(「唯一の正解」を与える者)の役割を担い、学習者に解答（または訳例）を与え、それを学習者が自らの翻訳に反映させる形式が主流となっていると考えられる。すなわち、これは Kiraly (2000:20)が呼ぶところの

'Transmissionist'型の翻訳教育であり、この方法による学習内容のみでは、学業終了時に翻訳実務を適切に遂行できるか甚だ疑問である。というのも、実際の翻訳業務を考えてみると、テキストの翻訳以外に対人関係スキルなど翻訳者にとって必要不可欠な要素が多いからである。

本稿では、英日翻訳教育における学習内容と現場実務の実態における乖離が、現実問題としてどのような点に介在しているのかを中心に論じる。

2. Expert の問題予見・解決能力と翻訳への適用性

これまでの翻訳研究においては、等価(equivalence)の概念を中心とする、SLT と TLT の相関関係に焦点が当てられてきた。これはテキスト自体の翻訳という、翻訳業務においては局所的な問題のみを取り扱ったものだと言える。反面、「プロ翻訳者とはどのような者か」や「プロ翻訳者になるにはどうすればよいのか」といった、「翻訳者というプロフェッショナル」という根本概念に関する研究にはこれまで重きが置かれなかった傾向がある。だが、前述した学生からプロへの移行に関する問題を解決するには、これまで研究された関連分野を見直し、研究が不足している側面を検討する必要がある。

翻訳理論において関連性がある分野をみると、'Translator (または Translation) Competence'の概念が存在する。この Translator Competence において議論の中心になっているのが、「プロ翻訳者はどのような知識・能力を有しているべきか」という点である。だが、Orozo (2000)などが指摘するように、広く認知された定義が確立しておらず、また実証的研究に基づく内包諸相についての検証が行われているとは言い難いのが現状である。現在、この分野で実証的研究をおこなっているのが、Process in the Acquisition of Translation Competence and Evaluation (PACTE, 2000 and 2003)である。PACTE の研究においては、実証的研究という特徴以外に、体系的なモデルが構築されたことが評価できよう。すなわち、プロ翻訳者が有すると考えられる competences と sub-competences が明示されるとともに'Strategic Competence'を中心とした具体的かつ包括的なモデルとなっている。だが、このモデルの疑問点も存在する。第一に、言語学習と翻訳学習の差別化が明確ではなく、言語学習者をも被験者として包含しているところに問題がある。確かに両者ともコミュニケーションの観点から共通性を有するものの、相違点が多いことも否めない。次に、'Knowledge'という概念が用いられているが、competence と knowledge の相関関係が曖昧であると言わざるを得ない。また、言語学習と翻訳学習には共通してコミュニケーションが介在するとしながら、他方では対人関係の重要性にはあまり言及していない。さらに、最も重要なことに、novice から expert に移行する上での competence 発達過程が今までのところ明確ではない。PACTE による translation competence の研究は現在も継続中であることから、今後このような問題に取り組む可能性もあるが、現時点での研究成果(また翻訳研究全般として)

から判断すると、前述の「プロ翻訳者とは誰か」そして「プロ翻訳者になるためには」という根本的かつ極めて重要な疑問には、明確な解答が存在しないと言っても過言ではなからう。

それでは、学際的見地に立ってみるとどうであろうか。上記の疑問に関し、他分野における研究を見渡すと、'Expert'あるいは'Expertise'という概念が浮上してくる。Expertiseの研究は、広範な分野（医学、会計学、法律、数学など）においてこれまで多くの理論的・実証的研究が行われてきている。紙面の関係上、詳細を論じることは不可能であるが、特筆すべき点について以下に簡潔に触れてみたい。

PACTEのモデルにおける問題点で指摘した、NoviceからExpertへの移行・発展段階について、数多くの研究が行われている。まず、この分野における体系的研究の草分けともいえるDreyfus & Dreyfus (1986)の研究では、5段階のモデルが示された。このモデルの特徴としては、諸段階に属する者がどの程度の非意識的行為を採用しているか、及び意思決定における既存知識の活用方法やその頻度における相違が挙げられる。しかし、直面する問題に応じた非意識・意識的な意思決定の方法や知識の内面化とその応用に関する考察の欠如といった、同モデルに対する批判 (Arts et al., 2000; Ericson & Smith, 1991) も存在する。

Expertとnoviceの相違を経験の差としてとらえる向きもあろうが、Ericsson (2004), Arts et al. (2006)によると、経験のみによりnoviceがexpertになることは不可能とのことである。Valkeavaara (1999), Boud et al. (1993), Jarvis (1995), Kolb (1984)はさらに踏み込んで、積極的な学習姿勢の重要性を説いている。またEricsson et al. (1993)は'Deliberate Practice'という概念を用い、目標に対し周到に設計された学習内容下での訓練が肝要であるとしている。Tsui (2003)は、現在行っている学習内容がexpertiseの習得という大目標において、正しい方向性にあるかどうかを見極めることの重要性を強調しており、上述の諸点と整合性のある見解を示している。

前述のTsui (2003)らの論点とは異なり、Glaser and Chi (1988)のモデルでは、認知心理学的な観点に立ち、経験の重要性をも認識している。すなわち、expertは専門分野に関する知識を深く吸収しかつ経験を有し、より体系的、自己規制的な方法でこれらを問題解決のため活用するという見地に立っているのである。

上記のいずれとも一線を画す研究的見地に立つのがBeaufort (2000)である。Beaufortは'Social Apprenticeship Model'を考案した。ここでは、談話的コミュニティの一員としてのexpertとnoviceに焦点が当てられ、コミュニティに属する他者との相互関係とコンテキストに特化した知識の提供により、novice自身のコミュニティにおける複数の役割に関し意識づけをすることが重要だと説いている。

以上の主要見地に基づき、「問題解決」という概念を考察する必要性があると考えられる。これは、体系的かつ自己規制的な学習・姿勢、経験、知識にせよ、コミュニティの一員という概念にせよ、いずれも目的は、遭遇する（または遭遇し得る）問題を解決するうえでどのようなアプローチがあり、その中から問題に即し最適な解決法を習得することが命題となっているといっても過言ではなからう。従って、以下では *expertise* 及び翻訳研究の分野において、問題解決という概念にどのような重要性が存在するか、さらにどのような特徴を有するのかを論じていきたい。

翻訳の分野においては、Orozco (2000), Seguinot (1998)が指摘する通り、翻訳者の翻訳能力を評価するうえで重要なのは、問題を解決することである。プロフェッショナルと称される者は、容易には実行できない事象に取り組むゆえ、そのように称されるわけであり、さらに時間的制約と高い完成度が課されるその職務において、いかに効率よくさまざまな問題を適切に解決できるかが問われることは自明の理である。この重要性にも関わらず、Baker (2000)は翻訳研究において、体系的かつ記述的方法による問題解決の研究がほぼ皆無である点を驚きの目をもって指摘している。翻訳以外の分野においても、Luconi and Tabatabai (1999), Tsui (2003), Glaser & Chi (1998), Valkeavaara(1999), Arts et.al, (2000), Bereither & Scardamalia (2003) などが指摘する通り、*novice* から *expert* への移行過程でも多様な問題に直面し、また *expert* となつてからはさらに複雑かつ精度の高い問題解決力が問われている。このことから、問題解決が上述の移行を効果的に図るうえでも必須であることは想像に難くない。

次に、他分野で *expert* の問題解決という概念においてどのような特徴があるのかを考察したい。これにより、問題解決と *expert* の実務能力の関係が浮き彫りになる可能性があるからである。まず注目したい点は、Bereither and Scardamalia (2003)が示唆するように、*expert* にとっての問題解決の目的である。すなわち、*expert* は問題を解決すること自体を目的として、日々難問に取り組んでいるのではなく、問題解決で得た知識・経験を吸収し、内面化するのである。Argyris (1991)や Tsui (2001)もこの考えに同調し、*expert* にルーチンと見られる状況から問題を同定する能力があり、これら問題を吸収する方法が *novice* との相違を生じさせていると考える。この点をさらに詳しくみると、Rollett (2001)は教育分野において、*expert* が広範な‘resolved situation’ (2001:28)を有していると説く。これは *expert* が過去に直面し、当初容易には解決できなかった状況を成功裡に解決することを意味する。Rollet (2001)はさらに、*expert* は現在そして未来において直面する問題において、類似した状況を応用するとしている。Luconi and Tabatabai (1999)による実証的研究においては、情報検索スキルの面から、*expert*・*novice* 間の顕著な相違点として戦略および知識の体系化が指摘されている。言い換えれば、新情報が既存知識とともに統合化されているということである。上記3点より注目し値するのは、*expert* が各自の専門分野における知識以上のものを有している点である。すなわち、状況に関連した知識を内面化する能力を有するか

否かが novice と expert との分岐点となっているように見受けられるわけである。言い換えれば、Chi and Glaser (1980), Chi et al. (1982), Glaser & Chi (1988) が主張するごとく、直面する問題を解決するため、問題に応じてどのような解決法に関する知識を採用すべきかを決定するうえで、問題解決に必要な体系的知識を有することが極めて重要であると言えよう。

以上のように、他分野における問題解決の重要性が示されていることに鑑み、翻訳という分野において、英日翻訳の実務で生じる「問題」とは何か、そしてその「問題」において novice と expert でどのような相違が存在するのか、またこういった問題を解決するうえで、どのような方法が用いられているのかを実証する必要があると考える。これはただ単に、novice・expert 間の相違を検証するのが目的ではなく、この相違に基づいて、翻訳教育における学習内容と実務要件の差を埋める一助にしようとする試みがこの研究目的の核となっていることは言うまでもない。

3. 研究概要

本研究では、以下の2点を研究テーマとした。

- 1) novice 及び expert が実際に直面する問題とは何か。
- 2) 1) の問題において novice と expert 間でどのような相違点が存在するのか。

上記2点以外にも「翻訳者はいかに主要な問題に取り組むのか」という重要な点もあるが、この次段階の研究結果については紙面の関係上、他稿に譲ることとする。

3.1 研究方法

今回の研究においては、質的研究を採用することとした。これは、各翻訳者 (expert・novice を問わず) が問題と考える点を洗い出すという本研究の性質上、各個人の価値観や信条を探求することを特徴とする、質的研究がより効果的であるとの判断に基づいたものである。すなわち Burns (1997) が述べているように、質的研究は、継続する日々の生活 (職務を含めた) の中で生じる個々の「意味」にアクセスできるわけである。これは、完成品としての翻訳というテキストを分析し、あるいは数字による一般化では分析することのできないものだと言えよう。

具体的な研究方法に話を移すと、本研究ではフォーカスグループ・インタビュー (Focus-group interview: 以下「FG」) を採用した。その理由としては、Kitzinger (1995), Morgan (1998), Gibbs (1997) が指摘するように、あるコミュニティで共有されている考えを、そのコミュニティに属する被験者間によるコミュニケーションで引き出す特徴が FG にあ

ることが挙げられる。さらに、Gibbs(1997)が主張するように、FG は他の諸方法に比べ、インタラクティブな交流を通して、あるテーマに対する被験者の態度、経験、信条などをより鮮明に示すことが可能であるという利点もある。上記2点を考慮に入れると、翻訳コミュニティに属する被験者が一堂に会しインタラクティブな共有することにより、広範かつ共通する翻訳上の問題点を導き出す可能性が高いと考えた。

3.2 被験者

本研究の準備段階でまず初めに決定しなければならなかった事項は、expert と novice をいかに定義づけるかであった。というのも、この2つの概念は抽象的なものであり、一定基準なしでは、曖昧な区分が生じてしまう。また、研究結果にも大いに影響を及ぼすことであるため、一定基準による区分を行う必要があった。結果として、翻訳分野におけるオーストラリアの国家資格である NAATI (National Accreditation Authority for Translators and Interpreters)¹ の 'Translator's level' (英→日 プロ翻訳者) 有資格者を基準と定めた。一方 Novice 被験者としては、オーストラリアの一大学にて大学院レベルの翻訳教育を受けている学生を対象とした。

3.3 データ収集

被験者対象を絞った後、対象となる expert と novice に研究概要ならびに研究への協力の呼びかけを電話にて行った。Expert 被験者は 57 名のうち 19 名から快諾をいただいた。一方、36 名のうち 16 名の novice に協力していただけることとなった。本研究の FG という性質上、時間調整後、5~7 名を 1 グループとして日時の設定を行った。さらに、FG の実施に際しては、研究概要および FG のすすめ方の説明後、調査担当者である筆者が極力質問を控える形をとり、自由な談話を引き出すよう心がけた。これは、本研究の目的が、翻訳または翻訳教育で生じる真の諸問題を洗い出すことであるためである。また、データ収集後の分析を考慮に入れ、被験者からの承諾後、デジタル録音を行った。

3.4 データ分析

まず初めに、収集されたデジタル・データを *exprescribe*² と呼ばれるソフトウェアを用いてその書起こしを行った。次に、質的諸研究で頻繁に用いられる NVivo³ を導入し、キーワードを同定した上で問題のカテゴリ分けを行った。この一般的に *coding* と呼ばれる方法は、談話分析で用いられる方法で、繰り返し指摘された概念や具体例に基づいてカテゴリに関係点を区分けすることが主な目的となっている。このカテゴリ化実施後、その原因考察を試みた。

以上が当研究の方法論に関する概要であるが、最後に、本研究の制約について触れたい。本研究は、質的研究の談話分析に基づいたものであり、初期的研究という性格上、厳密には実証的研究とは言い難い。さらに、未だ翻訳行動の観察を主眼とする研究段階ではないため、被験者の発言が実際の行動をすべて反映しているとは限らないという問題も否定できない。しかし、これらの問題点は後続研究にて解消するよう努めることにしており、その際に多面的研究方法を採用して、本研究の結果を実証していくことにしたい。

4. 研究結果と考察

本研究の性質上、本項では、目指すべき問題解決の指標となる **expert** が直面する諸問題をカテゴリー化するとともに、**novice** により指摘された諸問題との相違点を中心に考察する。

4.1 SLT のメッセージ理解

この問題は、単に翻訳者が英語の読解力に自信がないという理由から SLT になんらかの瑕疵があるケースまで幅広い。いずれにせよ、このカテゴリー下の問題は、SLT から発せられたメッセージに何らかの問題が生じ、翻訳者のメッセージ理解を妨げてしまうものと言える。まず注目に値する点は、**novice** の中で「自信の欠如」を示した談話が多かったことである。紙面の関係上、代表的な談話の一部しか紹介できないが、以下の談話が明確にこの点を示唆している。

Even now, I am sometimes not sure what original texts mean. I am worried if this is the case in real jobs how to solve this kind of problems. After all, we would need to find friends who are NSE and ask them for help. I am not sure what to do if I am really stuck.
(Student group 2)

ここでは、SLT 理解の重要性に重きが置かれているとともに、**expert** としてどのような方法が最善のものかについて知識と経験の欠如が浮き彫りになっているといえよう。

2点目としては、SLT の質が悪い結果生じる問題が挙げられる。これは **Novice・expert** 被験者いずれからも指摘された問題であるが、相違点も示された。下記の談話にみられる通り、**novice** による談話 a) の中では、クライアントなどに質問することなく、自分ですべて解決する傾向がみられた。中には、クライアントに相談するとの方法を示した被験者もいたが、自らの見解に基づく質問でなく、クライアントに指示を仰ぐのみという消極的ともいえる姿勢であった。それに比べ、**expert** の見解としては b)、みずからの推測に基づいて、それが正しいかクライアントと確認する方法が主流であった。

a) *It is something like that you need to pretend as if you understood what it*

means. (Student Group 2)

b) *Also, I would highlight the part that does not make sense and make a note saying check with the client if here means this.* (Expert Group A)

さらに、SLT が抽象的、あるいは理論的に理解し得ないという問題が示唆された。言うまでもなく、この結果として翻訳者は、書き手の厳密な意図を理解できないという問題に直面することとなる。この問題に触れたのは、expert 被験者のみであったが、自分なりに翻訳者がリサーチその他により、必要となる背景知識を得、その上で書き手またはクライアントと確認を行う方法が主流であった。さらに、この類の SLT を翻訳する際、SLT への忠実性と TLT における自然性の中で悩む姿も浮き彫りになった。これは、前者が翻訳者として最低限遵守する責務ではあるが、読者やクライアントに対し、翻訳者の未熟さによる産物という印象を与えかねない、という翻訳者のジレンマを指摘しているのである。さらに言えば、翻訳者がクライアント及び読者の心証に注意を払いたいとの姿勢が示されていよう。それだけ、expert 翻訳者の中には自らの職務に責任感を有し、なおかつ仕事に関与する人々への影響を考慮する必要に迫られていると言える。

4.2 英・日間の言語的相違に伴う問題

本カテゴリ一下で顕著に見られた問題は、SLT への忠実性と TLT における自然な日本語の実現というジレンマであった。これは、novice・expert を問わず繰り返し触れられた問題であり、この問題の核心は、どこでこの2点の線引きを行うかだと言える。ただし、テキストの種類とこの問題の相関関係において、novice と expert に相違が現れた。つまり、expert 被験者の中には、公文書や法律文書と、より商業的な色彩の濃いテキストでは、忠実性と自然性のバランスが異なってくることを指摘する声もあった。他方、novice 被験者の談話においては、この問題点におけるバランス維持の難しさにコメントが集中しており、テキストの種類との兼ね合いに言及する者はなかった。この相違もまた実務経験において、どれだけ広範なテキストの種類を翻訳する状況に置かれたか否か、そしてその経験をいかに体系的に内面化できたかという側面から生じた結果と言えよう。

さらに、novice 被験者にとってこの問題に関して指摘されたのが、「英語にひきずられた結果生じる、日本語として不自然な TLT の訳出」である。被験者本人が自認するように、日本語力ならびに日本語の言語的知識の欠如が原因として考えられる。他方、expert 被験者の談話で目立ったのが、SLT の十分な理解を行う努力をする姿勢であった。すなわち、プロ翻訳者としての高い日本語力に基づき、SLT の多読・精読を行うことにより、SLT の最適な等価語に行き当たるということである。この相違点からも、翻訳という業務へ取り組む姿勢が異なっていることがわかると言えよう。

このほかに、固有名詞の訳出が挙げられる。ここでは特に、機関名・役職名・人名が問題となったようである。この問題の主因は、オーストラリアで用いられる固有名詞の定訳がアメリカなどのそれと比べて、辞書やインターネットで存在しない傾向にあることである。さらに、役職名では、企業や公的機関によって職務分掌が異なるため、字面のみでは訳出が不可能である点が指摘された。この問題で *novice*・*expert* 間で明確な差異が現れたのは、情報源を用いたうえでの対処法だと言える。すなわち、*expert* 被験者は、調べても定訳が存在しない場合、クライアントに固有名詞が機関内でどのような役割を担っているのかを確認してから、適切な訳出を考えるとしていた。対照的に、*novice* 被験者の間で目立ったのは、こういった問題にいかに対応すべきかが定かではなく、さらに定訳がない場合は単語対単語(カタカナを用いる場合も含め)で自ら創出する傾向がみられた。つまり、*novice* による談話では、*expert* 被験者が指摘したクライアントとの確認や詳細情報の収集は選択肢に入っていなかったのである。この相違点からも、*novice* 被験者はクライアントを情報源としていかに活用するか、また表面的な訳出法を採用すると、どのような問題が浮上するかという点において、無知だと言わざるを得ない。

4.3 文体・読者層の判断における問題

本カテゴリーは、読者層を意識したうえでのテキスト全体の文体を判断することに関わる問題である。ここでは、*novice* と *expert* がどのような視点から翻訳をとらえているかに如実に表れたと言える。具体的に述べると、*expert* が挙げていた問題は、読者の年齢層、時代に適したことば使い、対象読者層に関する情報の欠如など、テキスト全体に関わるものであった。一方、*novice* 被験者の談話で主に議論の対象となっていたのは、特定分野(医療翻訳など)における背景知識の欠如に伴う、単語・フレーズレベルでの不適当な訳語使用であった。この相違は、*expert* と *novice* 間でいかに翻訳実務を鳥瞰図的な見地に立って、問題解決を行えるかを示唆しているように考えられる点で興味深い。つまり、*expert* 被験者(c)にとって、局所的な問題のみならず、テキスト全体に影響を及ぼしかねない問題に対する解決法の重要性を認識していると言えるかもしれない。逆に *novice*(d) は、自らの知識や翻訳能力への自信が欠如している傾向から、大局的な問題へ対応する余裕がないものと思われる。

c) *Well, it depends on what kinds of texts they are. For instance, if an original text is official one like a contract, we would need to translate more accurately with the original. Something like tourism documents, on the other hand, we would need to make translations more freely. So I think that it is important to vary depending on the kinds of original texts. But even so, it is hard to draw a line. (Others agree) (Expert Group 1)*

d) *If I try to translate as close as possible to originals, my translation becomes unnatural in Japanese whereas my teacher comments it is too free if I translate freely too much.*

After all, it may be a matter of my Japanese proficiency. (Student Group 2)

4.4 特定分野の背景知識に関わる問題

このカテゴリーは、医療、法律、ビジネスなど専門分野に特化したテキストを翻訳するうえで直面する諸問題を対象としている。Novice・expert 双方とも、特定分野における知識の欠如がコンテキストに適した訳出を行う上で障害となる点には同意していた。反面、両者間で顕著な相違もみられた。Novice 被験者の談話では、自らの特定分野での知識が欠如しており、特定のコンテキストで果たして適切な表現を選択できているのか否かが不明であるという類の発言が目立った。さらに、どのようにしてこうした知識を得ていけばよいのかも不明だとの談話もあった。これに対して、expert 被験者の中には、自らが現在従事している分野の翻訳では特に問題がないようだが、それ以外の分野では novice と同様、そのコンテキストに沿った訳出が問題になるという指摘があったのは興味深い。仮にこの指摘が現実に生じるものだとすると、得意分野以外では expert も novice と同様の不安や自信の欠如を露呈する可能性があるとも推察できよう。さらに、expert 被験者の談話で顕著であったのは、特定分野の特殊知識のみならず、文化的な背景知識をも視野に入れていた点である。例を挙げれば、英語の歌詞で聖書からの引用があったテキストや文芸小説の仕事で、内容にイギリスの封建社会制度に関する記述があったものなどが触れられていた。いずれも、翻訳者に SLT 文化に関する背景知識がない場合や知識があるとしても、それをいかに別の文化である日本語に訳出するかが問題として指摘されていた。これらは、訳者自身にとっても読解上支障をきたすだけでなく、読者にとっても不明瞭な TLT テキストを読まざるを得ない結果となる恐れがある。

4.5 時間管理に関する問題

翻訳者という職業において、時間が果たす役割は言うまでもなく大きい。この管理を怠ることにより、フリーランス翻訳者の場合は特に、次回からの業務依頼においてその影響は計り知れないものがあると言えよう。

第一の相違点は、所定納期内で翻訳を完成できるか否かである。一見、翻訳業務を行う者にとってはいわずもがなではあるが、novice 被験者にとっては一概にはそうとは言えないようである。さらに述べれば、自らの翻訳速度が翻訳者としては不十分だと考えているとともに、実際の翻訳業務において適切と考えられる翻訳速度の知識が欠如していると認識していた。翻訳実務の現実として、納期の短さが指摘されていたが、expert 被験者の談話に目を転じると、様々な実例を交え、業務を実際に納期内に終了している様子が示されていた。

第二点として挙げられるのは、翻訳者本人の許容速度と依頼業務を受託するか否かの判断力である。Expert 被験者の談話においては(e 参照)、翻訳者の時間的な判断が依頼業務を引き受けるか否かの重要な判断基準になること、また翻訳者自身がこのような判断力を有していると確信している点が明確に示されていた。さらに、expert による談話の中には、時間管理とともに、一定の時間でどの程度の TLT の質がクライアントにより期待されているかをも判断材料とするというものもあった。反対に novice 被験者(f 参照)は、上記の相違点に共通するように、自身の時間的能力及び要求能力に関する知識が欠如しているために、時間的な判断を下せないとの不安感が大勢を占めていた。

e) I think that the ability of knowing whether a job can be done within a given timeframe is one of the necessary requirements for translators. If a translator does not have this judgement skill and then call oneself as a translator, this person could lose credibility later on. When it comes to translation, there are many people who think that it is simply to translate into a target language. Rather, it is important that one knows own ability, otherwise, turn down an offer. (Expert Group A)

f) A: I wonder if that is the case in practice... I would like to know how fast professional translators translate a text. If this is considered in the NAATI exams, it would be 250 words.

D: I think that would be an indicator.

A: If so, it is hard, isn't it? (Student Group 2)

以上のように、novice 翻訳者には実務で要求される速度や納期などに関する知識に関する経験に乏しく、これらの学習機会を翻訳教育において提供する必要性が示されたと言えよう。

4.6 対人関係に関する問題

本問題は、翻訳業務に関わるその他の人々との関係を良好に築き、円滑に翻訳業務を行う上での問題と定義づけられる。通常、翻訳業務において翻訳者が直接的に関係を有するのはクライアント及び翻訳エージェントの担当者であるため、ここではこれらの人々(以下「クライアント」と総称)との関係を考察することにする。

第一点目の相違としては、クライアントの信用度に関する判断力が挙げられる。この問題の核心は、翻訳者が仕上げた翻訳テキストの提供を受け、その対価としていかに支払いを約束どおりにクライアントが行えるか否かであった。翻訳者は翻訳サービスを対価として、収入を得ているわけであるから、その対価が確実に得られるかどうかは、極めて重要

な問題であることは言うまでもない。この重要性を象徴するように、expert 被験者の談話の中には、クライアントのホームページを閲覧したり、実際にクライアントまで出向いて翻訳という仕事をクライアントがどのように捉えているかを判断したり、またトライアルを受けさせるか否かを基準とするなど、多用な尺度で慎重にクライアント選びを行っている様子が明らかになった。対照的に、novice 被験者による談話では、この問題についての見解はまったく認められなかった。

二点目は、翻訳上で不明な点に遭遇した際の対応である。Expert による談話をみても、まずは問題となる点を自身で情報収集などを行った上で、それでも明確にならない場合はクライアントに相談をするという方法が目立った。ここで注目に値する点は二点ある。一つ目は、クライアントとの緊密な情報確認により、リスク管理を行い、翻訳者としての予防策を張ることであろう。つまり、最終的な訳出に至るプロセスの中で、クライアントが希望する形を採用したことにより、翻訳者としては無用な責任を回避することができるわけである。いまひとつは、独力でのリサーチを通じたクライアントへの印象の向上があると考えられる。不明な点をクライアントにただ単に「わかりません」という態度で示すのではなく、自身でここまでリサーチを行い、こういう意味ではないかと推察されるが正しいか、といった姿勢を示すことにより、クライアントの翻訳者への心証や信頼度にも影響を与えるところがあると考えられる。対照的に novice 被験者による談話においては、クライアントへの相談よりもむしろ自らで問題解決を行う姿勢が主流であった。具体例を挙げると、SLT の質に問題がある場合には、novice 被験者の多くが、クライアントとの確認を行わずに自身で訳を「作り上げる」方針を示していた。被験者のうちの一人は、「わかったように見せかける」という表現すら用いていた。ここから、novice 被験者の考える expert 像が垣間見えると言える。すなわち、novice にとってのプロ翻訳者像とは、クライアントに迷惑をかけず、自らの手ですべての問題を解決できるものなのではなかろうか。

三点目は、expert 被験者のみからのものであるが、クライアントの性格を考慮に入れた対人関係の難しさである。例として挙げられたのは、テキストの質が劣悪で、訳者自身がリサーチ等を行った後でも、意味が通らなかった事例である。クライアントにこの点を指摘すると、クライアントが怒り、事態を収拾させるのに手間がかかった。この例から、クライアントとのコミュニケーションにおいては、相手の性格に応じた柔軟な対応が求められることが示されていると言えよう。

5. まとめ

本研究では、novice・expert 間の翻訳における実務上の問題点および両者の相違をテーマとして取り組んだ。上記の諸問題点の発見に基づき、両者間の相違点も明らかになった。総体的にみると、novice の翻訳実務における自信および知識の欠如が際立ったと

言える。すなわち、これは翻訳というコミュニティで受け入れられる、または期待される能力の何たるかが理解できていないということにほかならない。具体的に言えば、翻訳に関わる人々をどう活用していくべきか、依頼業務を受けていい場合とそうでない場合をいかに判断するかなど、自信と知識が欠如すると、適切な判断ができない結果に陥るのは自明の理であろう。さらに、実社会での翻訳経験に乏しいことから、expert 翻訳者が負う責任についての自覚も欠如していると言わざるを得ない。対照的に expert 被験者による談話から、実務に当たった経験を内面化したうえで、翻訳というコミュニティで求められる態度や行動をとれる自信が感じられた。さらに、翻訳における問題を大局的な視点から捉える能力を有しているといっても過言ではなかろう。これは翻訳にとりかかる前及びとりかかっている段階に限らず、自らの行動がその業務に携わるすべての人にどのような影響を及ぼすのかを念頭に入れた談話が目立ったことからわかる。テキスト内での問題解決に限らない、手堅く大局的な対応が目立った。

以上のように、従来の transmissionist 型教育の結果、学習内容と実務で要求される能力に差異が生じてしまう現実の一端が示されたと言える。さらに、上記の諸問題及び相違諸点に基づき、翻訳教育において novice・expert 間の差異を埋める方向性が示されたと考える。

今回の研究は、問題に照準を絞ったものであり、また談話とその分析という方法上、被験者が述べた事項と被験者の実行動に相違が存在する可能性は否定できない。よって、今後の研究においては、novice と expert がどのように問題に対処するのか、そして実証的研究として実際の翻訳行為およびその理由の観察を行い、多面的な研究を展開する必要があると考える。

著者紹介: 井上 泉(INOUE Izumi) オーストラリア・マッコーリー大学大学院言語学部講師。専門は翻訳理論、翻訳教育、エキスパート論。主な論文に" Problem-Based Learning as a potential pedagogical approach for translator education", *Meta*. Vol5. 4 (2005) など。連絡先: izumi.inoue@ling.mq.edu.au (英語のみ)

参考文献

- Argyris, C. (1991). Teaching smart people how to learn. *Harvard Business Review*, 69(3): 99-109.
- Arts, J. A. R. M., Gijsselaers, W. H., and Segars, M. S. M. (2000). *Expertise Development in Managerial Sciences: The use of knowledge types in problem-solving*. New Orleans: American Educational Research Association.
- Arts, J. A. R. M., Gijsselaers, W. H., and Boshuizen, H.P.A. (2006). Understanding managerial problem-solving, Knowledge use and information processing: Investigating stages from

- school to the workplace. *Contemporary Educational Psychology*, 31 (4): 387-410.
- Beaufort, A. (2000). Learning the Trade: A Social Apprenticeship Model for Gaining Writing Expertise. *Written Communication*, 17: 185-223.
- Bereiter, C. and Scardamalia, M. (1993). *Surpassing Ourselves: An inquiry into the nature and implications of expertise*. Chicago: Open Court.
- Boud, D., Cohen, R., and Walker, D. (1993). Introduction: understanding learning from experience. In D. Boud, R. Cohen and Walker, D. (Eds.). Buckingham: SRHE and Open University Press. 1-18.
- Burns, R. B. (2000). *Introduction to Research methods, 4th edition*. Frenchs Forest, NSW: Pearson Education Australia.
- Chi, M. T. H., Glaser, R. and Rees, E. (1982). Expertise in Problem Solving. In R. J. Steinberg (Ed.). *Advances in the Psychology of Human Intelligence*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Dreyfus, H. L. and Dreyfus, S. E. (1986). *Mind over machine: The power of human intuition and expertise in the ear of the computer*. New York: Free Press.
- Ericsson, K. A. (2004). "Deliberate practice and the acquisition and maintenance of expert performance in medicine and related domains." *Academic Medicine* 10.
- Ericsson, K. A. and Smith, J. (1991). Prospects and limits of the empirical study of expertise: an introduction. In K. A. Ericsson and Smith, J. (Eds.). *Toward a General Theory of Expertise: Prospects and Limits*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ericsson, K. A., R. T. Krampe, et al. (1993). The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological Review* 100: 363-406.
- Gibbs, A. (1997). Focus groups. *Social research update*, Winter (19).
- Glaser, R. and Chi, M. T. H. (1988). Overview. In M. T. H. Chi and Farr, M. J. (Eds.). *The nature of expertise*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Jarvis, P. (1995). *Adult and continuing education. Theory and practice (2nd ed.)*. London: Routledge.
- Kiraly, D. C. (2000). *A Social Constructivist Approach to Translator Education: Empowerment from Theory to Practice*. Manchester: St. Jerome Publishing.
- Kitzinger, J. (1995). Introducing focus groups. *British medical journal*, 311: 299-302.
- Kolb, D. A. (1984). *Experiential learning: experience as the source of learning and development*. Englewood Cliffs: Prentice Hall.
- Morgan, D. L. (1998). *The focus group guidebook*. London and New Delhi: Sage Publications.
- Morgan, D. L. (1998). *Planning Focus Groups*. London and New Delhi: Sage Publications.
- Orozco, M. and Hurtado Albir, A. (2002). Measuring translation competence acquisition. *Meta*, XLVLL (3): 375-402.
- PACTE (2000). Acquiring Translation Competence: Hypotheses and Methodological Problems of a Research Project. In A. Beeby, D. Ensinges, and Presas. M. (Eds.). *Investigating*

- Translation*. Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins.
- PACTE (2003). Building a translation competence model. In F. Alves (Ed.). *Triangulating Translation: Perspectives in process oriented research*. Amsterdam: John Benjamins.
- Tsui, A. B. M. (2003). *Understanding expertise in teaching : case studies of second language teachers*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Seguinot, C. (1998). Knowledge, expertise, and theory in translation. In A. Chesterman, N. Gallardo San Salvador and Y. Gambier (Eds.). *Translation in context: Selected contributions from the EST Congress, Granada 1998*. Granada: John Benjamins.
- Valkeavaara, T. (1999). "Sailing in Calm Waters Doesn't Teach": constructing expertise through problems in work- the case of Finnish human resource developers. *Studies in Continuing Education*, 21(2): 177-196.

¹ NAATI の認定制度ならびにレベルの詳細は www.naati.com.au を参照のこと。

² Expresscribe はデジタル化したデータをデジタル形式で書き起こす特徴を有する。本研究では、その簡便性と時間節約を理由としてこれを採用した。

³ NVivo は談話分析において必要となるコーディング作業を体系的かつ柔軟に処理できる特性を有する。一つのデータの分析および全データにおける所定コードの串刺し検索も可能。

